

修士論文（要旨）  
2023年1月

「ようだ」と「らしい」  
-推定用法を中心に-

指導 茶谷恭代 先生  
言語教育研究科  
日本語教育専攻  
220J3012  
尤 兼賢

Master's Thesis(Abstract)  
January 2023

Yooda and Rashii  
:Focusing on Presumptive Usage

BINGMAO YOU  
220J3012  
Master's Program in Japanese Language Education  
Graduate School of Language Education  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor : Yasuyo Chatani

## 目次

1. はじめに .....	1
研究の背景と研究の目的 .....	1
2. 先行研究とその問題点 .....	2
2.1 判断の根拠の違いという観点からの先行研究 .....	2
2.2 話者の意識の違いという観点からの先行研究 .....	3
2.2.1 話者と事態との心理的距離の遠近 .....	3
2.2.2 話者が自分の下した判断に対する責任意識 .....	5
2.3 本質的・基本的な性格の違いを論じる研究 .....	6
3. 研究の対象と方法 .....	7
4. 実例分析 .....	7
4.1 「ようだ」について .....	8
4.1.1 「以前のこと」が前接する場合 .....	8
4.1.2 「結果の状態」が前接する場合 .....	13
4.1.3 「現在の状態」が前接する場合 .....	16
4.2 「らしい」について .....	20
4.2.1 「以前のこと」が前接する場合 .....	21
4.2.2 「結果の状態」が前接する場合 .....	24
4.2.3 「現在の状態」が前接する場合 .....	25
5. 「ようだ」と「らしい」の違いについて .....	28
5.1 共通点 .....	28
5.2 相違点 .....	28
6. まとめと今後の課題 .....	28
参考文献	

## 要旨

現代日本語の「ようだ」と「らしい」は類似表現としてとりあげられることが多く、その使い分けは中国人学習者にとって難しいものである。本稿では、それぞれが複数の用法をもつ「ようだ」と「らしい」について、特に重なりが見られる《推定用法》を中心に分析し、両形式の用法の広がりや違いを考察する。

「ようだ」と「らしい」に関する先行研究は多く、大まかに、次のような観点から違いを論じようとするものである。①判断の根拠の違いという観点（柏岡 1980、寺村 1984、早津 1988）、②話者の意識の違いという観点（i 話者の心理的距離の遠近によって、両形式の差異を説明しようとする研究（早津 1988、菊地 2000） / ii 話者の自分の下した判断に対する責任意識の有無によって、両形式の差異を説明しようとする研究（柏岡 1980、金 1992））、③両形式の本質的・基本的な性格の差異をみる観点（中島 1990、田野村 1991）である。しかし、根拠の質的な差や話者の意識的な差という観点からの説明は、個々の実例に適用して理解するには解釈が曖昧になりやすいものもあり、日本語学習者にとって明解であるとは言い難い。本研究は「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」から収集した実例をもとに、「ようだ」と「らしい」による推定判断の特徴が文の構造の中にどのようにあらわれるか、また、「ようだ」と「らしい」に前接する内容を形式的な面から検討することを通じて両形式の違いを考察した。

分析の結果、「ようだ」も「らしい」も前接する品詞は動詞である場合が一番多く、動詞においてはシタ形をとる場合が多いことがわかる。根拠が明示される場合に、「ようだ」も「らしい」も《推定用法》だと解釈される。この場合の「ようだ」と「らしい」はどちらも「どうやら」「どうも」と共起でき、置き換えがしやすい。一方で、根拠が明示されない場合に、「らしい」は《推定用法》よりも《伝聞用法》として解釈されやすくなる。それに対して、「ようだ」は会話文では《観察したことをそのまま述べる用法》と、小説の地の文においては《認識したことをそのまま述べる用法》が多く、これらの場合に、「ようだ」は「らしい」に置き換えにくい。また、「ようだ」には「今思えば～」「思い出せば～」といった表現と共起して「記憶」を根拠とする例もあるが、それらは「記憶」をよりどころに、以前に認識したことを述べていると考えられる。このような例は「ようだ」の特徴であり、「らしい」とは置き換えることができない。また、文中で用いられるときに、「らしく」はあとに続く主節に根拠が明示されやすく《推定用法》であることがほとんどだが、「ようで」はそうではなく、《認識したことをそのまま述べる用法》のほうが多く見られた。そして、「ようだ」は《観察したことをそのまま述べる用法》か、《認識したことをそのまま述べる用法》の場合に「明らかに」「確かに」という副詞とも共起できる。これは「らしい」には見られない「ようだ」の特徴としてあげられる。

本稿では、「ようだ」「らしい」に前接する事態の分析は動詞文にとどまり、さらに「習慣」や「性質」をあらわす場合についても検討に至らなかった。また、過去、現在、未来という時間軸上にある出来事を表す動詞文とは性格が異なり、恒常的な性質をあらわす名詞文、形容詞文の場合の分析も「ようだ」「らしい」のそれぞれの用法と関連づけながら検討していく必要がある。今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 柏岡珠子 (1980) 「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41 : 169-178
- 菊地康人 (2000) 「「ようだ」と「らしい」——「そうだ」「だろう」との比較も含めて——」『国語学』51-1 : 46-60
- 金東郁 (1992) 「モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い」『日本語と日本文学』17 : 21-31
- 田野村忠温 (1991) 「『らしい』と「ようだ」の意味の相違について」『京都大学言語学研究』10 : 62-78
- 寺村秀夫 (1984) 「概言のムード」『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 242-260
- 中島孝幸 (1990) 「不確かな判断 : ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』1 : 25-33
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版 163-170
- 早津恵美子 (1988) 「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7-4 : 46-61
- 三宅知宏 (1995) 「ラシイとヨウダ—概言の助動詞①—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版 183-189
- 李光赫 (2011) 「「ようだ」「らしい」的日汉对比(4) : 表示『样态』的『好像』的语法特征」『日语知识』9 : 9-10
- 李光赫 (2011) 「「ようだ」「らしい」的日汉对比(7) : 「ようだ・らしい」与『好像·似乎』」『日语知识』12 : 8, 16